



第 2 回初年次教育学会 (2009 年 9 月 19 日～20 日開催)

目次

1. 出張報告
初年次教育学会参加報告
2. 教職員研修会報告
(1) 2009 年度第 2 回教職員研修会報告
(2) 2009 年度第 3 回教職員研修会報告

出張報告

初年次教育学会参加報告 (法学部長 山本 啓一)

参加したセッション・ワークショップについて

(1) 9 月 19 日 (土) 10:00～11:40 ワークショップ I-B

「協同学習の進め方と考え方」安永悟先生 (久留米大学)

隣の人とペアになって「協同学習」のポイントを実践

- ・ 1 分 30 秒間自己紹介 (グループエンカウンター)
…自己紹介とここで何を得ようと思ったかを共有する。
- ・ 話した内容 (たとえば、「協同学習の基本要素」等) を少しずつ、隣の人と確認しながら進行する。
- ・ 個人思考→集団思考のサイクルを絶え間なく回していく…「シンク＝ペア＝シェア」の技法の紹介。
- ・ 時間をきっちりと区切るところがポイント。
- ・ 安永先生の持論：能力別クラス編成に意味はない。
発達障害の子どもがいてもむしろよい結果が出る。

(感想)

※ 座学は理解度 5%、協同学習は理解度 50%ということは、理論的には、グループワーク内容を座学に比べて 10 倍に薄めても、結果は同じということになるのではないか。

※ 授業を細かく区切りながら、内容について少しずつ確認させながら進めていくやり方は、法学教育にも応用可能ではないか。

※ 安永スタイルは、学びのプロセスがあまりにも構成的すぎて、すべてシナリオ通りに進むように思われる。

講義はその場のノリと雰囲気ですべてのシナリオに流れることもある。そこから新たな発見が生まれることもある。そうした偶然性を加味しているのか。

※ 個人プレーとしてグループワークを授業に取り入れることは、意識を持った教員であれば割と簡単に可能である。しかしこの授業スタイルを組織的に導入するのは難しい。

※ 安永スタイルは、教員自身がファシリテーターとして、教室をコントロールできるスキルを十分持っていないければ、混乱して終わりがかねない。授業スタイルだけを学んで習得できるものではない。意欲と技量のある教員ならば可能だろう。

※ 安永スタイルは、授業の進め方というノウハウの次元ではなく、「教室で伝える知識」についての根底的な変化を求めているはず。この点、誤解している人が多い。

(2) 同 15:30～18:40 自由研究

グループ I-6 「協同学習・グループワーク」にて発表 (発表の趣旨)

・九州国際大学初年次教育の目的、方針

- ・モチベーション（動機付け）の優先順位
 - 【達成動機】課題を達成することは楽しい。
 - 【親和動機】友人と協力することは楽しい。
- 【学習意欲】新しいことを知ることは楽しい。
→【成長意欲】自ら変化し続けることは楽しい。

- ・真の目的—教員の意識変化
- 個々の教員の主体性を尊重する。
文章や言葉、研修に全面的に頼らない。
学生が頑張る姿、成長する姿を見せる。
- …「学生から学べる」場をつくり、そこに教員が参加する。
 - …学生主体の FM（フレッシュャーズ・ミーティング）とする。

※ 報告では、安永先生に対し、学びの前にモチベーションが必要であり、その前に人間関係の構築が必要ではないかという初年次プロジェクトの問題意識をぶつけるつもりだった。ただ、安永先生は残念ながら、要件が急遽入り、欠席されたのが残念だった。

※ 初年次教育を制度的に導入するプロセスについて、我々が行ってきた方法を紹介しようと試みた。安永先生や他大学の報告事例は、授業 1 コマ分や個人プレーのレベル（授業の技法）にとどまっておらず、初年次教育の組織的な導入については、ほとんど議論されていない、ということがいえる。

(3) 9月20日(日) 9:30~11:10 ワークショップ II

「アクティブ・ラーニングをデザインする」

岩井洋先生（帝塚山大学） 中村博幸先生（京都文教大学）

- ・アクティブ・ラーニングの方法論（学生がより能動的に学習に参加すること、あるいはそのようにさせる仕掛けのこと）に関する説明とワークショップ（ジグソー法・ジグソー学習の体験）
- ・6人1グループ。新型インフルエンザに関する6本の新聞記事を配布される。ワークシートに見出し、要約（箇条書き）を作成。それをもとにグループに対して内容を報告。その上で、全員でポスターを作成。その間、30分ほど。かなりタイトなスケジュール。
- ・グループ学習のポイント…仕込みは入念に（道具へのこだわりは重要）、ライブ感を大切に、個人とグループの作業を組み合わせる、全体と部分の関係を意識する、作業の意味付けや「謎解き」を明確にする。

※ワークショップ後の懇談

京都文教大学 中村博幸先生、河合塾教育研究開発本部 成田秀夫さんたちと

- ・初年次教育学会でセミナー活動などをやっていただければと要望した
- ・（成田さん）河合塾は90年代後半から初年次教育に注目している。現在、「社会人基礎力」の育成と測定について検討をしている。協力してくれるモデル校を探しているとのこと

初年次教育学会参加報告（学務事務室 片山 浩己）

2009年9月19日から20日に関西国際大学で開催された初年次教育学会第2回大会に参加しました。

初年次教育は1970年代後半から80年代前半にかけて、アメリカの多くの高等教育機関で導入され、学生の中退率抑制や学生の"成功"に有効な教育プログラムであることが評価されており、日本でもここ数年急速な広がりを見せて

始めております。2008年12月答申の中教審大学分科会制度・教育部会「学士課程教育の在り方に関する小委員会」による『学士課程教育の再構築に向けて』においても、高等学校から大学への円滑な移行に果たす初年次教育の重要性が指摘され、学士課程教育の中に明確に位置づけることが提言されています。

初年次教育が導入された背景として、高等教育のユニバーサル化の進行に伴い、多様な学生が高等教育に進学するようになる一方で、卒業時の質保証が求められるようになり、入学した学生を大学教育に適応させ、中退などの挫折を防ぎ、成功に水路づける上で初年次教育が効果的であるという期待や評価が高まっているからです。

本学においても2008年6月の関西国際大学の濱名学長の講演や同年11月の初年次教育学会第1回大会の参加などにより、初年次教育への関心が高まる中で、2009年1月には初年次教育プロジェクトを立ち上げ、本格的に初年次教育に取り組むようになりました。プロジェクトでは、5月には「平成21年度 大学教育・学生支援推進事業【テーマA】 大学教育推進プログラム」への申請、6月には「初年次教育シンポジウム—学生のモチベーションに火をつけるために—」を開催するなど初年次教育の浸透に力を入れてきました。このような状況の中で、初年次教育に対する理解をより一層深めるために、今回この学会に参加しました。

今回の学会では、1日目にワークショップI、シンポジウム「高大接続からみた入学前教育」及び自由研究発表Iが行われました。ワークショップIではA「初年次教育の評価の方法を考える」に参加しました。このワークショップではまず担当者から初年次教育の評価方法について、ダイレクトエビデンス（直接評価：学習成果の評価）とインダイレクトエビデンス（間接評価：学習プロセスの評価）の具体的な手法についての説明がなされ、その後参加者が4～5名ずつのグループに分かれ、それぞれの大学で行われている初年次教育の評価方法について紹介し、その内容について議論しました。それを取り纏めて模造紙に記入し、代表者1名が発表するというスタイルをとりました。本学はまだ初年次教育の評価方法を議論するところまで至っていませんが、今後の議論の際には十分参考になるものでした。

続いて、午後のシンポジウムでは「『大学全入』時代の高大教育接続（私見）」、「交代接続からみた入学前教育（高大接続の在り方）」、「初年次教育と入学前教育（大学は高大接続にどのように取り組むのか）」という3件の講演がありました。その後、神戸大学大学教育推進機構教授 川嶋 太津夫氏がコメンテーターとなり、講演

を行った3名（文部科学省 先崎 卓歩氏、千代田区立九段中等教育学校長 高木 克氏、関西国際大学長 濱名 篤氏）のシンポジストによる、「高大接続からみた入学前教育」についての討論があり、最後に講演を含めた質疑応答が行なわれました。

総会が行われた後、自由研究発表Iが行われ、本学の山本法学部長が、「人間関係・信頼関係が生み出す学内コミュニティと修学意欲—学生と教員のやる気を生み出す初年次教育」と題して発表を行ったグループI-6に、参加しました。

2日目は、ワークショップII、自由研究発表II及びラウンドテーブルが行われました。最初に行われたワークショップIIでは、A「初年次教育における教職協働」に参加しました。このワークショップでは初年次教育を進めていくうえでの教職協働という課題をダイアログという対話方法を活用し、課題解決を議論していきました。このダイアログという対話手法は、個人ワークとグループワークを組み合わせたもので、ワークショップの運営方法の1つです。その具体的な進行方法は、次のとおりです。

1. 個人ワーク【3分程度】

- (1) テーマ（2つ）から語ることを個人で考える。
- (2) 語ることをメモしておく。

2. グループワーク【25分程度】

- (1) 各自が順番に語り、聴く。【1～2分程度×参加人数】
- (2) 語り合う。
- (3) 内容をまとめる。（キーワード化）【3分程度】

3. 個人ワーク【3分程度】

- (1) すべてのワークを終えて思ったことを、個人で振り返る。
- (2) 振り返ったことをメモする。

4. 会場内で共有

各グループが話し合った内容（キーワード）を報告する。

ダイアログを開始する前にそのウォーミングアップとして、こだわりマップを作成しました。その手順とは 1) グループ（4～5名）を作る、2)各自が思う『初年次教育と教職協働』を”こだわりマップ”として作成（表現）する、3)各自が作成した”こだわりマップ”を先程作ったグループ

内で順々にまわしていく、4)まわし終えたところでグループ質疑を行うことです。私自身はまだ初年次教育に携わって日が浅く、『教職協働』など考えたこともなかったので、この”こだわりマップ”に殆ど書き込みができませんでした。その後グループ内の他の参加者の”こだわりマップ”を拝見しましたが、他の参加者の”こだわりマップ”は私のものより書き込まれていて、勉強不足を痛感させられました。

続いて行われたダイアログでは、『教職員は、初年次教育をどのように感じているのでしょうか』、『初年次教育を実施する責任者に相談を持ちかけられたら、どのようなアドバイスをしますか』という2つのテーマが出され、進行役の方の助言等により個人ワーク及びグループワークともに各人が熱心に取り組みました。なお最後の会場内の共有については、時間がなかったこともあり、進行役の方が指名した3グループのみの発表となりました。

最後に進行役の方からこのワークショップ全体の総括を行い、担当者のコメントの後、ワークショップは盛況のうちに終了しました。

その後、自由研究発表Ⅱが開催されましたが、参加予定を変更して、その前に行われたワークショップⅡで、山本法学部長が参加したB「アクティブ・ラーニングをデザインする：90分授業のなかにアクティブ・ラーニングをどう組み込むか」のコーディネーターである京都文教大学の中村博幸教授と河合文化教育研究所の成田秀夫氏にグル

ープワークを実践するためのポイントについてアドバイスをいただきました。中村教授には主にグループワークの1つである「アクティブ・ラーニング」の手法について、成田氏には河合塾が1990年代後半から取り組んだ低学力学生に対する学力向上への取組と我々が取り組んでいる初年次教育との関係などについて長時間にわたって話をさせていただき、有意義な情報交換の場となりました。

昼食の後、ラウンドテーブルが行われ、グループD「ベネッセ大学生調査から捉える現代初年次学生の特徴—受験勉強スタイル、学習態度、学習成果の観点から—」に参加しました。

最後に閉会式が行われ、初年次教育学会は終了しました。

今回の学会に参加して、日本の初年次教育はまだ始まったばかりで、この学会は設立後まだ日が浅いこともあり、参加者も多く、参加者のモチベーションも高いため、今後の更なる発展が期待できると思いました。また教育学以外の専門分野から初年次教育に携わっている研究者も多いので、今後は初年次教育の多様化が期待されます。

今後の本学の課題としては、スタートしたばかりの初年次教育を全学的な取り組みとするべく、研究会開催等の更なる啓蒙活動を行うと共に、初年次教育の評価など今まで取り組んでいない事項の取り組みや、キャリア教育等の初年次教育と隣接する他の教育プログラムとの連携を図る必要があると思われます。

教職員研修会報告

2009年度第2回教職員研修会報告（学務事務室 片山 浩己）

2009年9月30日午後1時より、2102教室において、2009年度第2回教職員研修会が開催されました。今回は各学部の特徴ある取組の紹介として、法学部徳永准教授、経済学部宮崎教授、国際関係学部高橋教授の計3名から、各20分程度の事例報告がありました。

まず、法学部の徳永准教授から「—大学教職員の情報共有による発展を目指して、初年次法学教育での取り組み—」と題して、ご自身が担当された「法学」の講義内容を中心に報告がありました。報告の前半でフレッシュャーズ・

ミーティングなど今年度春学期に法学部全体で取り組んだ初年次教育関係の紹介がなされ、その後講義での取組内容について報告がありました。先生は法学を担当するにあたり、講義を21世紀型市民を析出するための啓蒙活動であると位置づけました。また大学における法学の講義をはじめ、大学で学生が行うあらゆる手続きを近代化のための啓蒙プログラムとして位置づけました。講義では学生生活の中での事例を取り上げるなど、どんな些細なことも「法」に絡めて話すことにより、「法」が身近な存在として感じ

られるように工夫しており、人間生活のあらゆる場面に「法」が介入していることを強調しているとのことでした。

続いて、経済学部の中里教授から「経済学部における寄付講座の取り組み」と題して、2004年度から経済学部で取り組んでいる寄付講座についての報告がありました。この寄付講座は、経済学特殊講義・経営学特殊講義として春学期に開講しており、受講者全員に毎回レポート提出を課しているとのことでした。本学の寄付講座の特徴の一つは、他大学に見られるような1社による講座（冠講座）ではなく、複数の企業等が講師を派遣していただいております、派遣していただいている企業から講師料・交通費などを支給していただいている点にあるとのことでした。地元の企業で活躍する経営者・専門家の生の声を聞くことにより、学生に経済学・経営学により強く関心を持ってもらい、今後の就職活動にも役立ててもらいたいという狙いがあるとのことでした。なお、2009年度からは「市民公開講座」としての性格を持たせ、わずかですが一般市民の参加が得られたとのことでしたが、一方ではこれまでの寄付講座の維持

については個人の力に負うものが多く、継続するための体制作りが今後の課題であるとのことでした。

最後に、国際関係学部の高橋教授から「入門セミナーにおける初年次教育の取り組みについて」と題して、新カリキュラムによって誕生した「入門セミナーⅠ」で行った合同発表会の準備段階から当日の様子についての報告がありました。準備を進める際、教員はサポート役に徹し、発表テーマ、内容等はゼミ生の主体性にまかせたが、思うようにうまくいかなかったとのことでした。発表当日は発表の上手下手はあったものの、1年生全員が集まって成果を見せ合うよい機会であり、このような機会を通して、ゼミでの一体感、信頼感を高められたとのことでした。ただし、この発表のために時間を費やしたために本来入門セミナーが取り組むべき事項ができなかったなど今後の課題も出てきたとのことでした。

なお、当日は入試等も開催されていた中で、37名（教員32名、職員5名）の参加がありました。

2009年度第3回教職員研修会報告（学務事務室 片山 浩己）

2009年11月25日午後3時より、2102教室において2009年度第3回教職員研修会が開催されました。今回も第1回と同様に「学生のモチベーションに火をつけるために」をテーマに、前半は上智大学総合人間科学部の奈須正裕教授の講演と本学教員2名の事例報告、後半は、奈須先生と本学報告者との意見交換を行いました。

まず、奈須先生の講演では、「学びの意欲を育てる」と題して、モチベーションが専門である先生から、学生の意欲を育てる3つの要因（1.うまくやれそう、2.がんばる価値がある、3.あの人がいるからがんばる）と6つの原理（1-①がんばればうまくいく、1-②何をどうすればよいかわかっている、2-①面白い、2-②自分の決めたことだからがんばる、3-①関心を持たれている、3-②一体感がある）について詳細に説明がなされました。また小学校の教育現場を研究フィールドとしている先生は小学生の事例を交えて、授業を行う際、教員自身もテンションを高め、ワクワク感を持たないと学生もそういう気持ちにならないと

のことでした。

続いて、経済学部の中里教授から「ホテルマンと浮浪者—総合演習の試み—」と題して、総合演習での取り組みについての報告がありました。総合演習の学生の気質等に触れながら授業内の状況について説明され、他の演習と同様に出席の良くない学生に電話連絡等を取り、次回以降の出席を促しているうちに、一人の学生が大学を退学したいと申し出たとのことでした。その時、先生が教員ではなく一人のおじさんとして対応するようにしたところ、その後の学生の態度に変化が出てきたというのです。しかも、秋学期になってからは毎回出席し、履修していない友達も授業に連れてくるようになったとのことでした。

続いて、経済学部の陳准教授から「運命共同体としてのゼミと教師の役割—経営演習での試み—」と題して、経営演習での取り組みについての報告がありました。例年行っている他大学との合同合宿を本学が幹事で行うこととなり、2年生に発表をさせ、3年生に運営をさせたとのこと

です。発表を担当する2年生には4月から2つのチームで自主的に活動をさせたのですが、夏休みになっても作業が進まず、事前にリハーサルをしても真剣に取り組まなかったため、先生は最下位になることを覚悟したそうです。予想通り本番では失敗して、本学の順位はワースト1、2で、その上、参加した他大学の学生から酷評されたとのことでしたが、そこから学生が他大学との格差を認め、自分たちの足りないところを強化したいという願望が出てきて、自主的に活動するようになったとのことでした。

その後、山本法学部長の司会で、奈須先生、中里先生、陳先生及び会場の参加者との意見交換を行いました。事前に会場から集めていた質問について、講演者、報告者から丁寧な回答がなされました。ここで、奈須先生の「中里先生、陳先生の報告で共通しているのが、失敗することを覚悟したことで、その覚悟した後の行動がその後の学生の変

化をもたらしたのではないか」との言葉が印象的でした。

研修会終了後、奈須先生、中里先生、陳先生及び初年次教育プロジェクト委員で、情報交換会を行いました。情報交換会では1時間以上にわたり活発な意見交換が行われました。

なお、当日は他の会議等も開催されていた中で、55名（教員42名、職員13名）の参加がありました。



【初年次教育】

高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸体験を“成功”させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに修得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新入生に最初に提供されることが強く意識されたもので、1970年代にアメリカで始められ、国際的には「First Year Experience（初年次体験）」と呼ばれている。具体的内容としては、(大学における学習スキルも含めた)学問的・知的能力の発達、人間関係の確立と維持、アイデンティティの発達、キャリアと人生設計、肉体的・精神的健康の保持、人生観の確立など、大学における教育上の目的と学生の個人的目標の両者の実現を目指したものとなっている。

出典：『学士課程教育の再構築に向けて』（2008年12月24日中央教育審議会答申）より抜粋

【初年次教育学会】

近年、日本の大学は学力・学習目的・学習動機・学習習慣の多様な学生を受け入れるようになってきている。中教審の答申においても、高等学校から大学への円滑な移行に果たす初年次教育の重要性が指摘され、学士課程教育の中

に明確に位置づけることが提言されている。

これら諸状況の変化を背景に、日本でも初年次教育は急速な拡がりを見せ始め、研究者による研究の成果や担当教職員による効果的なプログラムの構築が増加している。しかし、まだまだ日本での実践や研究実績の蓄積とそれらの共有は十分とはいえ、実践的な教育内容や効果的な教育方法の開発や改善に加え、初年次教育の教育効果の測定や理論的な説明をはかり、初年次教育のもつ重要性を日本の高等教育界に定着させていく必要が高まっている。また、国際的な初年次教育関係団体・学会との情報交換・交流も推進していく時期に至っている。

このような趣旨のもとに、初年次教育学会の設立を企図し、2008年4月に設立総会を開催した。

出典：初年次教育学会設立趣意書より抜粋

発行：2010年1月31日

九州国際大学 F D委員会

〒805-8512 北九州市八幡東区平野1丁目6番1号

TEL093-671-9010 Fax093-662-8340

<http://www.kiu.ac.jp>

編集：大学事務局 学務事務局